『他人の顔』論―書き足された手記の裏側

弘前大学人文学部人間文化課程四年　〇五H一〇三七　工藤麻優美

はじめに
第一章　〈群像版〉と〈講談社版〉の比較
一．〈群像版〉と〈講談社版〉の構成および時間系列
二．〈群像版〉と〈講談社版〉の相違点
第二章　「ぼく」による語り
一．時間表記の矛盾
二．一人称による語りの特徴
三．他の文学作品の参照
四．「ぼく」の不正確な記述か隠蔽か
第三章　空気拳銃と構成
一．空気拳銃の役割
二．書き足された手記
三．手記が書かれた目的
おわりに

卒業論文の目次は右記のようなものであるが、この縮約では紙幅の関係上、具体的な分析や参考文献等を割愛したり、論点を主要なものに限るなどしてまとめ直した。

安部公房『他人の顔』は、一九六四年に発売された「群像」一月号が初出である。ところが同年九月に講談社から刊行された単行本では、大幅な加筆・修正がなされており、内容や構成などがより複雑なものとなっている。本論では、初出のほうを〈群像版〉、後に単行本化されたほうを〈講談社版〉として取り扱った。まず〈群像版〉と〈講談社版〉を比較し、相違点を明らかにした。次にそのうちとくに重要な三点、時間表記の矛盾、空気拳銃の有無、構成の違いについて分析を加えた。その結果、〈講談社版〉における複数の時間の整理、および手記が書かれた真の目的について考察した。

〈群像版〉と〈講談社版〉には、一体どのような違いがあり、何が問題となるのかを明らかにするため、〈群像版〉と〈講談社版〉の構成および時間系列を【表】にまとめた。【表】に確認できるように、〈群像版〉と〈講談社版〉には様々な相違点があるが、本論で注目したのは、次の三点である。

・〈講談社版〉では〈群像版〉では見られない時間表記の矛盾が起きている点（例…一週間のはずの出張期間が〈講談社版〉では九日間になっている）。
・〈講談社版〉では出張期間中に、ヨーヨーのほかに空気拳銃も購入されている点。
・〈群像版〉のテキストは本文のみである（編集されていない）が、〈講談社版〉のテキストは本文と本文のあいだに、追記や欄外註などが挿入されている点（編集されている）。

そこで、〈講談社版〉における時間表記の矛盾がなぜ起きたのかを検証するため、テキストの特徴である「ぼく」による一人称回想形式の語りに焦点をあてた。一人称回想形式の語りでは、括復法が使われているとき、語り手の忘却によって時間表記に矛盾が生じる場合がある（G・ジュ

ネット『物語のディスクール』を参照)。また、夫婦の日記文という一人称による語りの形式が採られた谷崎潤一郎『鍵』を参照した考察もおこなった。その結果、語り手の主観によってなされる一人称による語りでは、ある場合には意図的に真実でないことが述べられたり、語り手にとって不都合な情報が隠蔽される可能性があることが判明した。

本論はこれらをふまえ、〈講談社版〉の時間表記の矛盾は、『鍵』のように語り手が意図的に時間表記を隠蔽しようとした結果生じたものではなく、「ぼく」による不正確な記述が原因となっていることを明らかにした。その理由は、かりに語り手である「ぼく」が意図的に本当の時間表記を隠蔽したのだとすると、読み手である妻を混乱させることに何の利益が生じるのか、妥当性を見出せなかったからである。さらに、時間表記の矛盾が起きている部分には括復法が使われていたことも指摘した。〈講談社版〉では「ぼく」の出張期間の記述に不整合が見られるが、その原因は出張一日目に行なわれた「仮面に皺をなじませる作業」を出張四日目まで「まったく同じことを、まったく同じ順序で、繰返した」ためだと述べる、括復法にあると考えられる。

次に、空気拳銃と構成の関連について考察した。空気拳銃は〈講談社版〉にのみ現れるモチーフである。この存在が、犯罪欲求を助長させるような凶暴性をもった仮面の人格(以降、「仮面の人格のぼく」と呼ぶ)を「ぼく」の中に具現化した点に〈講談社版〉の特色がある。この空気拳銃は、『他人の顔』というテキストの結末をも変えてしまうものであった。〈群像版〉は《妻の手紙》で終わるため、手紙を読んだ「ぼく」がその後どうしたのかは不明だが、〈講談社版〉の結末は《自分だけのための記録》であり、この後に「ぼく」が空気拳銃を使って何らかの罪をおかしたということを読み手に推測させる。〈群像版〉において「ぼく」が最後に犯罪へと駆り立てられなかったのは、空気拳銃が存在しなかったために犯罪欲求を助長する仮面の人格が具現化しなかったからではないか。

〈講談社版〉の手記がどのように編集されたのかについて整理したところ、この手記は本文のほかに欄外註や追記なども挿入されているため、複数の時間性が内在していることが明らかになった。時間性については、テキストから以下の四点を確認できた。

・本文はおよそ六月初旬から七月初旬の約一か月のあいだに書かれた。

・本文を書き終えたあと、三日間の編集期間がある。

・欄外註は「〈追記〉よりも時間的には先立って」、「本文が書かれた直後くらいに、書かれた」。

・追記は「本文と追記のあいだには、ほぼ三ヵ月近くものひらきがある」。

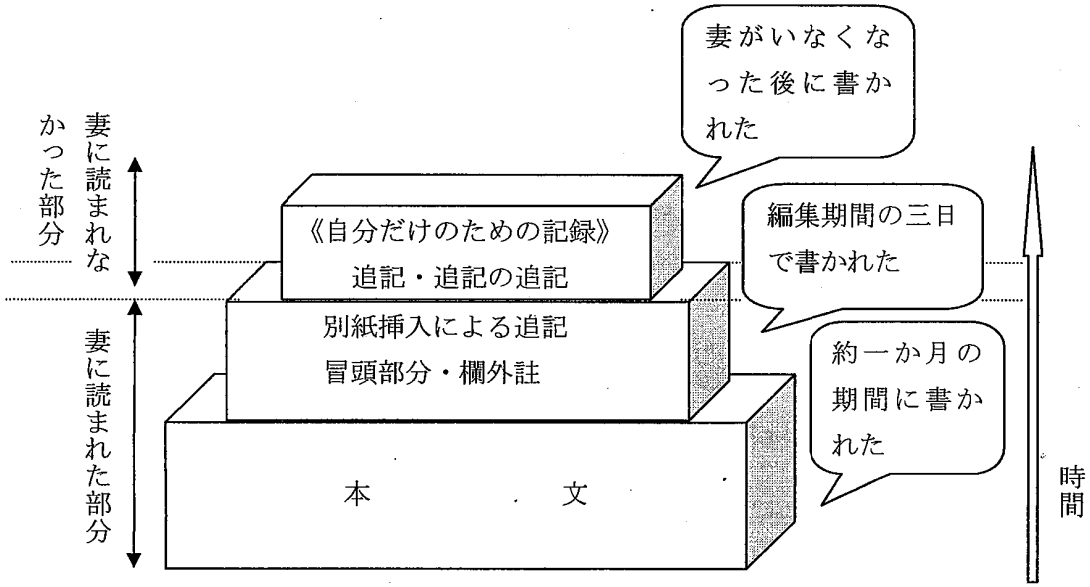
これらより、手記が書かれた順序をまとめると、【図】のようになる。これにより、〈講談社版〉の手記は妻に読まれた部分と読まれなかった部分があることが明確になった。

以上をふまえると、〈講談社版〉の手記が書かれた真の目的について考察することができる。手記の書かれた目的は、当初は妻との「通路の復旧作業」を実現させるための妻に向けた告白文であった。しかしそれが不可能になった「ぼく」が、「行為によって、現状を打開し」、「試みを虚無から救いだ」すために犯罪をおかすことを決意するに至って、語りの主導権は、「ぼく」から「仮面の人格のぼく」へと移った。これと同時に手記の目的は、不特定多数の第三者への犯罪予告(「有罪の証拠物件」)へと変わったのではないか。仮面をかぶった「ぼく」は、「完璧な匿名性」、つまり「完全に誰でもない人間」となって社会にまぎれこみ、犯罪をおかし続けるのだという不気味なメッセージが〈講談社版〉の手記から立ちあらわれてくるのである。「匿名」の「有罪の証拠物件」だからこそ、「人間」は「ぼく」という犯罪者が誰なのか、どこにいるのかを特定することが

できず、不特定多数の読者は恐怖心・不安感を喚起することになる。これこそが「ぼく」の「人間」に対する復讐なのである。

このように本論は、〈群像版〉と〈講談社版〉を比較し、時間表記の矛盾、空気拳銃の有無と構成という三点について分析を行なった。まず、〈講談社版〉にのみ生じた時間表記の矛盾は、「ぼく」の不正確な記述に起因していることを明らかにした。そのうえで空気拳銃が追加して描かれることで、「ぼく」のなかに「仮面の人格のぼく」という凶暴な二つ目の人格が具現化しただけでなく、そもそも手記の目的を妻に対する「仮面劇の告白」から、不特定多数の読者に対し、自らの「有罪の証拠物件」を誇示するものへと変えた。〈群像版〉にくらべ、〈講談社版〉は明らかに複雑な構造と性質を帯びている。この比較によって明らかになった〈講談社版〉における時間表記の矛盾が、語り手である「ぼく」の存在を不明確な、掴みどころのないものにさせ、読者を混乱させることで、作品の世界で生じた恐怖を、読者のいる現実世界へと連続させる効果が〈講談社版〉で得られていることを論証した。

【図】手記が書かれた順序



【表】〈群像版〉と〈講談社版〉の構成および時間系列

時期	〈群像版〉	〈講談社版〉
もうじき夏		冒頭部分（妻に宛てた手紙）
秋頃	《灰色のノート》 ・画集事件が起きる。 ・仮面を作る決意をし、さまざまな作業・準備をする。	《黒いノート》 ・画集事件が起きる。 ・仮面を作る決意をし、さまざまな作業・準備をする。 ・《愛の片側》という映画を見る。
二月の初め		
三月最初の日曜日	・街に出て、男から顔の型を買い取る。	・街に出て、男から顔の型を買い取る。
出張一日目（5／26）	《黒いノート》 ・作業が続く。 ・S荘で、仮面に皺をなじませる。	《白いノート》 ・作業が続く。 ・S荘で、仮面に皺をなじませる。
出張二日目	・仮面をつけて食事し、街でタバコを買う。	・仮面をつけて食事し、街でタバコを買う。
出張三日目	・街で仮面の服を買う。仮面をつけたまま管理人の娘と遭遇する。	・街で仮面の服を買う。仮面をつけたまま管理人の娘と遭遇する。
出張四日目	・ヨーヨーを購入する。	・ヨーヨーと空気拳銃を購入する。
出張五日目	・銭湯へ行く。仮面をつけて妻を誘惑する。	作業を繰り返す。
出張六日目	・昼近くに妻と別れ、S荘へ戻る。	《灰色のノート》 ・妻を襲う空想をする。 ・銭湯へ行く。仮面をつけて妻を誘惑する。
出張七日目（6／1頃）	・繃帯を巻いて自宅へ帰る。夜、仮面をつけて妻と二度目の逢引をする。その後、手記を書く決心をする。	・昼近くに妻と別れ、S荘へ戻る。 ・繃帯を巻いて自宅へ帰る。夜、仮面をつけて妻と二度目の逢引をする。その後、手記を書く決心をする。
出張八日目		
出張九日目（6／3頃）		
※時間表記的に矛盾		
手記を妻に見せた後	《妻の手紙》	《自分だけのための記録》 ・〈妻の手紙――〉も挿入されている。